

言葉のいのち

山 崎 英 穂

奨励者紹介〔やまざき・ひでお〕

日本キリスト教団主恩教会牧師

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、¹霊に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』

と書いてある。」

(マタイによる福音書 4章1―4節)

独特の言葉によって

私は四国の西の端、宇和島というところで生まれ育ちました。当時は本州四国連絡橋はなく、都会は遠い存在で、あこがれを抱いていましたが、西宮の大学に入って初めて阪神地方で過ごすことになりました。尼崎、さらに神戸と通算40年あまり住んでいますが、ただその間、九州の大分県佐伯市と長崎県佐世保市の教会で11年間過ごしました。四国、関西、九州と過ごしてきたのですが、それぞれの土地には独特の方言というものがあって、最初は違和感を覚えたりしましたが、しだいに愛着を感じてきたものです。狭い日本でもそれぞれの地方には独特の言葉、方言があります。同じ関西でも京都、大阪、神戸とそれぞれ異なっています。しかしそれぞれの独特の言葉で人々は語り合い、心を通わせ、コミュニケーションをとっているのです。何語であっても言葉は尊いものであると思います。

試されるほどに

マタイによる福音書4章1―4節は、主イエスが誘惑を受けるために荒野に導かれたところから始まっています。誘惑や試練というのは、だれでも受けたくないものです。しかし、この直前に主イエスが洗礼を受けられた物語があり、その中で「これはわたしの愛する子」という声が天から聞こえたとあります。イエスは神に愛されていることが明らかになったのです。そこで試みを受けられたのです。試練を受け、苦しみに遭うのは神から憎まれ嫌われているからでも、無視されているからでもありません。愛されているからだということです。

私が神学部を出て最初に副牧師として遣わされた教会でのことです。祈祷会で毎週だれかが証をすることになっていました。ある日、女学生が証をされました。その方は幼い頃に養女に出され、九州から西宮に移り、それなりに愛されて育たれましたが、やはり寂しい思いをして育ったのです。しかし大学に入って教会に行くようになり、洗礼へと導かれたのです。そのような背景の中で、その方が「試されるほどに愛さ

れている」と言われたのです。若い日の私にとっては衝撃的な言葉で、今日までその言葉が私の心に刻み込まれています。神を信じれば、苦しみがなくなるわけではありません。信仰をもってもたなくても、人生に苦難や試練はつきものです。避けることはできません。むしろ信仰をもつゆえに、余計に悩むこともあります。神に愛されているからこそ試みに遭うことになるのです。むしろ神を信じることで「試されるほどに愛されている」ことを知るのです。旧約聖書のヨブ記でもヨブは神に忠実でしたので、サタンの厳しい試みに遭うことになりました。それもヨブが神の愛と信頼の中にあっただからだと思います。

言葉で生きる

さて、悪魔の誘惑に対して、4節で主イエスは、
「『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』
と書いてある」

と答えられました。イエスが引用された言葉は旧約聖書の申命記8章3節にある言葉です。「言葉で生きる」とは大変印象的です。イエスは、パンなどなくても生きられるとは言われませんでした。三度三度の食事は不可欠です。主の祈りでも「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」と祈るようにと教えられたように、食べ物なしでは生きることができないことをよくご存知でした。しかしそれだけではなく、「言葉で生きる」と言われたのです。人は言葉なしでは生きることができません。ある家で1日の親子の会話は3秒であるというのを読んだことがあります。「オキロ!」「ネロ!」、それに「勉強せよ!」というのが加わるのです。たった3秒です。極端な例ですが、これでは子どもは成長しません。人が生きるためには言葉が必要であり、コミュニケーションが不可欠なのです。しかし多弁や饒舌であればいいのかというと、そうではありません。言葉で生きるとは「愛によって生きる」ということだと思います。姫路の出身で椎名麟三というクリスチャンの作家がいました。この人の言葉の中に「言葉のいのちは愛である」というのがあります。彼の生家は姫路の書写山の麓にありました。そのため書写山の公園の一角にある石碑には、この言葉が刻み込まれています。万博公園の太陽の塔を作った岡本太郎と親しかったということで、岡本太郎のユニークなダイナミックな字で「言葉のいのちは愛である」と書かれています。10年ほど前に見に行ったことがあります。人は言葉によって生きるものですが、言葉のいのちは愛だと言うのです。

無条件の愛

先日あるドラマを観ましたが、その中で「愛されないほどつらいことはない」という言葉がありました。この言葉は「エデンの東」という古い映画の中に出てくるセリフだそうです。この主題歌は有名で、皆さんも聴かれたことがあると思います。私も若い日にこの映画を観たことがあります。が、「愛されないほどつらいことはない」という肝心の言葉があったことを記憶していませんでした。私たちはだれも自分は愛されていないと思うことがあります。無視されたり裏切られたりすると、つらくなります。人は皆、愛されていないと思い、呻いているのです。しかし神は、イエス・キリストの十字架においてこの世を愛し、復活においていのちを与えてくださったのです。これが聖書の中心的メッセージです。しかも神の愛は無条件の愛、無償の愛です。神に背を向けて生きている弱い私、何もよいこともできないし、むしろ人の足を引っ張っているこ

ともあります。生きていて何になると思うこともあります。長く寝たきりの方から「生きていて何になるのでしょう」と問われたこともあります。しかしそのような私たちに神の愛の言葉が語りかけられているのです。私たちはありのままで神から愛され、ありのままで生きていていいと神は言われるのです。この社会において「お前なんか生きていて何になる」というような否定の言葉が、洪水のように押し寄せてきます。しかしそれでも人は言葉によって生きるのです。むしろ神の言葉は人を生かす愛の言葉、救いの言葉です。この言葉を聞く時、生きていこうという勇気、存在への勇気が生まれてくるのです。言葉のいのちは愛です。言葉の意味、言葉の中身、生命線は愛なのです。愛として結実しないような言葉は無意味です。真の言葉には愛が詰まっているのです。聖書の神の愛の言葉には不思議な力があります。だれかの小さな言葉で深く傷つき、人生が壊されることもあります。しかし言葉には人を生かし、動かす大きな力があるのです。ましてや祈りをこめ愛をこめ、生と死をかけて語りかけられる神の真実の言葉は人生を大きく変えるのです。まさに聖書には人生の夜を照らす光の言葉、喜びや希望の言葉がぎゅうぎゅうに詰まっているのです。ノーベル文学賞を受けたソ連時代の作家ソルジェニーツインの『ガン病棟』を読んで、感銘を受けたことがあります。この物語にエフレムという頑強な50前の男が出てきます。彼はこれまで病気をしたことがなく、自分には限界があるなどと思わず、いつまでもこのままの状態が続くと思っていたのです。ところが生まれて初めて病気になったのです。しかもガンだったのです。彼は死の恐怖におびえながら、病院内で「人は何によって生きるか」と尋ねてまわります。するとある人は「食糧の配給によって生きる」、ある若者は「人は空気によって、それから水によって、食べ物によって生きる」と答えます。当然のことです。さらにある人は「自分の能力によって生きる」と言い、またある官僚は「思想性と社会的利益によって生きる」と答えたのです。しかしエフレムはどの答えにもまったく納得できないまま、死がしだいに近づいてくるのです。そのような時、トルストイの短編『人は何によって生きるか』を読んだのです。そして人は愛によって生きるのだというこの単純な事実気づいたのです。

惨めさを知る

私のことを少し話すことをお許しください。私の父は米原で生まれましたが、早くに両親を亡くし、弟と妹と別々に親戚にあずけられました。父は教会に行っていた叔母のところに引き取られ、手を引かれて日曜学校に行っていたのです。しかし成長してから近江帆布という紡績会社に勤め、教会から離れていました。詳しいことは分かりませんが、左遷されたのか、遠く四国の西端にある宇和島の近江帆布の工場に転勤しました。そこで母と出会って結婚したのです。1939年1月のことでした。ところが2カ月後の3月に、父は工場のベルトに巻き込まれて右腕を肩から失ってしまったのです。まさに天国から地獄に突き落とされるような体験でした。4カ月ほどしてふと教会の看板が目について、礼拝に出席しました。その時の話がルカによる福音書15章の放蕩息子の物語でした。放蕩に身をやつした弟がどん底の中で我に返り、父の家に帰ったのです。すると父は遠くから見つけ、大歓迎してくれたのです。私の父はこの物語を聞いて、この放蕩息子とは自分のことであると思ったのです。小さい頃に教会に行っていたのに、いつの間にか神を忘れていたのです。しかし、このようなどん底を経験した自分をも神は両手を広げて受け入れてくださる方だと知ったのです。こうしてその年のクリスマスに夫婦そろって洗礼を受けました。戦争中も何とか教会に繋がり、戦後2年経ってその両親の間に私は生を受けたのです。母は苦勞したせいでしょう、私が

中学生になった頃に関節リウマチという難病になり、20年間つらい闘病生活をいたしました。身体障がい者の父と難病の母のもとで私は思春期を過ごしましたが、その頃、自分は惨めだと感じていました。友人たちの両親は健康で社会的にも立派なのを見て、羨ましくも思っていました。しかしその頃、「人間は考える葦である」という言葉で有名なパスカルの言葉に出会いました。「人間の偉大さは自分の惨めさを知ることの中にある」という言葉を発見し、救われる思いをしました。惨めさを知ることが大切なことであり、そこに人間らしさがあるのだと思ったのです。

今の今まで

言葉はしばしば人を殺します。しかし真実の言葉は人を生かすのです。言葉のいのち、生命線は愛です。今はまだ言葉の意味が分からなくても、いつか分かる時がくるのです。私が九州の教会にいた時、礼拝に出席して聖書の言葉に熱心に耳を傾けるご夫妻がおられました。するとある時、ご夫人から手紙をいただきました。自分の息子が悪い仲間に誘われて、ふとしたことから殺人を犯してしまい、刑務所で刑に服しているという苦渋の言葉が赤裸々に述べられていました。その頃、私は刑務所の教誨師をさせていただいていたので、私を信頼して苦しみを打ち明けてくださったのでしょう。その後も何度もお手紙をいただきましたが、ある手紙の中で、このような歌を作ったということで書いてこられました。「いつの日か おぼえし聖句の一節が み救いだとは 今の今まで」というすばらしい歌でした。何気なく読み、何気なく聞き、何気なく覚えていた聖書の言葉の中に深い意味があり、神の愛の叫びがあり、それは救いの言葉であったことに今になってやっと気づいたという意味でしょう。皆さんも今たくさんの言葉に出会ってください。いや、一句でもよいのです。聖書の言葉はもちろんのこと、すばらしい先人の言葉もたくさんあるので、人生を生かす言葉に出会っていただきたいと思います。

私は思春期に障がいをもった父と難病の母のもと、惨めさを感じていたことがあったと言いましたが、この両親から信仰を受け継ぎ、神の言葉を知り、主イエスに出会い、伝道者として歩んでくることができたことを後になってからはっきり認識し、その後は両親を誇りに思うようになりました。つたない話をご静聴くださり、感謝いたします。

2017年11月15日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録